

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：82622

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370152

研究課題名(和文)古代ローマ工芸美術の基礎的研究 ～テッラ・シギラタについて～

研究課題名(英文)Fundamental Study on Ancient Roman Craft Art - About Terra Sigillata

研究代表者

向井 朋生 (MUKAI, Tomoo)

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・リサーチフェロー

研究者番号：30620463

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：テッラ・シギラタは古代ローマ期の最も有名な上質土器であり、大量に生産されローマ帝国全域で流通した。西欧の古代ローマ研究では昔から研究対象であるが、地中海土器学が存在しないわが国における知名度は限りなく低く、研究対象としてまともに扱われることもなかった。本研究はテッラ・シギラタをわが国の研究者に正しく紹介することを主眼に、西欧での研究状況と日本語用語の整理を行った。

紀元前2世紀から紀元後7世紀に渡って地中海各地で生産されたテッラ・シギラタを体系づけてまとめる作業は、研究の細分化が進んだ西欧では行われておらず、地中海土器に関しては初学者であるわが国の研究者向けにそれが日本語で行われた意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：The Terra Sigillata is the most famous category of fine ware and it was massively manufactured and diffused throughout the territory of the Empire during Roman times. In research on the Roman civilization of the Western world, it is one of the important topics of study, but its recognition in Japan, where the Mediterranean ceramology does not exist, remains too limited.

The aim of my research is to present the Terra Sigillata to the Japanese researchers of all the fields that work on the Roman civilization. For this purpose, I have systematized the history of research of the Western world and Japanese terms on this subject.

Systematizing the long history of Terra Sigillata is something that is no longer done in research on the Roman civilization of the Western world because of their research segmentation. It is for this reason that this study is of enormous importance for our country, where the study of Roman ceramology has only just begun.

研究分野：人文学

キーワード：美術史 工芸史 考古学 古代ローマ 多国籍

1. 研究開始当初の背景

(1)古代ローマ土器のカテゴリの一つであるテッラ・シギラタ (*Terra Sigillata*)は、主に食卓で使用されていた精製土器の一種である。その製作技法と施された豊かな装飾(植物・幾何学文様から神話主題まで)から古代ローマ期の工芸美術の重要な史料であるとともに、その膨大な流通量と広範な分布範囲から遺跡・遺構の年代比定や当時の交易の状況を知るうえで考古学・歴史学的にも重要な史料である。

発達した地中海交易のおかげでイタリアやガリアの大生産地のテッラ・シギラタは、最前線の駐屯地をも含めた帝国の辺境地域は勿論、交易によってインド大陸まで流通していた。各地でその影響を受けた在地系のテッラ・シギラタも大量に生産され、北アフリカ産のものはそれらが衰退した後を引き継ぎ、地中海一円に輸出され、ウマイヤ朝に支配以降の紀元後7世紀末まで流通していた。

(2)このようにテッラ・シギラタの生産・流通がローマ帝国全域をくまなくカバーしている以上、少なくない数のわが国の研究者が、西地中海地域からエジプトも含むオリエント全域にわたるローマ帝国領内で古代から初期中世文明の研究に従事する場合には、その存在を避けて通ることは出来ない。

しかしながらわが国には、ローマ土器一般を扱う研究者が不在であることに加え、テッラ・シギラタに関わる研究が幅広い分野にわたるために分野間の意思疎通の欠如しており、使用される用語は不統一である。その結果として、日本において出版されている論文、発掘報告書、辞書、展覧会のカタログの記述にいたるまで統一性は一切なく、定義も曖昧で誤用も絶えない状況であった。

このような状況を改善し、テッラ・シギラタが有効な史料としてわが国でも活用される環境を構築する必要性が本研究を始める動機となった。

2. 研究の目的

(1)本研究は、古代ローマ工芸美術において多様な装飾とその流通範囲から非常に重要な位置を占めるローマ土器であるテッラ・シギラタに関して、欧米諸国の研究者による今日までの研究を精査し体系付け、その解釈と対応する日本語用語を整理することにより、我が国の古代西洋美術史のみならず西洋古代史と古典考古学などの分野の研究者が参考とする手引きを作成し提示することにより古代ローマ工芸史、ひいては古代ローマ文明研究全体に関わる我が国の研究に貢献することを目的とする。

3. 研究の方法

(1)研究方法はテッラ・シギラタの産地への研究旅行と文献収集を主とする。テッラ・シギラタとその派生土器の主要な

産地である、イタリア、南フランス、小アジア、チュニジアの工房遺跡調査と当該地域での資料収集を行う。

テッラ・シギラタ研究史であるところの外国文献の収集にあたっては、国内の図書館では不十分であるので現地での収集作業を必要とするが、古い雑誌文献等については、PDF版を容易に入手することが出来るウェブ(例：<http://www.persee.fr>)を活用することにより、収集にかかる時間・費用の短縮を図る。

(2)日本の学界における関連諸学のテッラ・シギラタへの言及を精査し、日本の焼き物用語も踏まえた上で正確な用語を確立する。

工芸史の側面からテッラ・シギラタ研究における日本語用語の確立するためには、日本の焼き物の技法・用語との互換性に最大限に注意を払う必要がある。したがって、日本の焼き物の歴史ではなく、その技術的側面について整理し、テッラ・シギラタの呼称自体も含めて、どこまで各用語を和訳していくかを考察するために、国内における文献収集と平行して国内の焼き物の産地への研究旅行も行う。

4. 研究成果

(1)研究成果はわが国の古代ローマ研究者が最も多く参加する日本西洋史学会において(「テッラ・シギラタ」、2015年5月17日、富山大学)発表されたのに続き、本研究を引き継ぐ国際共同研究加速基金によるウェブサイト作成によって広く公開される。

テッラ・シギラタに関連する日本語用語を確立したことは、わが国の古代西洋美術史のみならず西洋古代史と古典考古学などの分野の研究者がテッラ・シギラタを記述する際に各自で訳語を「発明」しなければならない状況から解放されることである。このことは元来専門外である諸研究者の負担を軽減すると共に、テッラ・シギラタ研究の敷居を下げ間口を広げることにつながり、古代ローマ工芸史、ひいては古代ローマ文明研究全体に関わるわが国の研究の進展に大きく貢献したと言えるだろう。

(2)テッラ・シギラタに関する現地調査は、イタリア(アレツォ、ピーサ、プッツォーリ)、フランス(リヨン、ラ・グロフザンク、バナサック、モンタン)にある主要工房に加えて、ドイツとギリシアでも行われた。ドイツでは北部ガリアの主要ローマ都市であったトーリアを中心に、北部ガリアの帝国国境地域における各種テッラ・シギラタの分布状況を確認するとともに、当該地方最大のテッラ・シギラタ生産地であるラインツァーバーンにおいてテッラ・シギラタ博物館とその窯跡を調査した。この地域における調査は、テッラ・シギラタ生産拠点の移動がローマ軍

の前線と深く関係していると考えられていることから必要であった。

ローマ時代後期の主要なテッラ・シギリタ産地であるチュニジアの調査は近年の政情不安とテロの影響で満足に行うことが出来なかった。それを補うための資料収集として、フランス共和国マルセイユ市ジュール・ヴェルヌ遺跡における発掘出土未発表資料の研究においてテッラ・シギリタを扱う一方、同国オート＝アルプ県のギャップ市在の県立博物館に収蔵されている、同市出身の鉄道技師クレマン・オーベールによって 19 世紀末にチュニジア・アルジェリア国境地帯において集められた考古学コレクションの研究プロジェクトに参画した。現在では完全に外国人が近寄ることのできない地域であるこの国境地帯の遺跡群から発見された 500 点以上の古代土器コレクションの中核を占めるのは、現在まで研究の進んでいない地方産テッラ・シギリタである。そのほとんどが完全な形で保存されていることもあり、このコレクションの研究はチュニジア中南部産テッラ・シギリタ研究において多大な貢献となった。

(3) テッラ・シギリタに関する諸外国の基本文献の分析に加え、わが国におけるテッラ・シギリタに関する研究を取り巻く現状について調査し(西洋史や考古学分野の学術論文、遺跡発掘報告書、一般歴史概説書、歴史辞典、美術辞典、展覧会カタログなど)、テッラ・シギリタおよびその派生土器について、わが国でどのように紹介されているかを調べた。対象とした項目はその名称、解説、紹介されている学史であり、執筆者が判明している場合には執筆者の専門分野及びそのバックグラウンドも記録した。

その結果、本研究に取り組むきっかけとなった、テッラ・シギリタにおける混迷の原因である表現と用語の未統一について状況整理することが出来た。わが国におけるテッラ・シギリタの紹介は海外文献からの翻訳を主とするものであることは当初から予想されていたが、各執筆者が参考にする言語によって日本語で紹介される内容が大きく異なることが判明したのは収穫であった。例えば「テッラ・シギリタ」を「サモス焼き」と記してある場合には、その執筆者は英語文献、特にイギリス研究者の記述を参照していることが分かった。テッラ・シギリタはイギリスの学界で「Samian ware」と呼ばれており、わが国において「サモス焼き」と訳出されることがあるからである。その呼称が不正確であることは、現地の土器研究者には周知の事実であるが、わが国のローマ文明研究者に共有されている認識ではない。したがって、現地調査によってサモス島においてローマ時代に生産されていた上質土器は技法も形状もテッラ・シギリタとは異なるものであり、いかなる関連性も見つけられないことをあ

らためて学会で説明した。

また、ほとんどの執筆者が古代土器について門外漢であるため、専門用語が意識されている箇所も多く混乱に拍車をかける元になっていることも確認された。

(4) 学会発表だけではなく、研究会、シンポジウム、大学の公開講座(高千穂大学、東京都)や市民向けの講義(朝日カルチャーセンター)を通して他分野の研究者、学生および一般の方々に話をする機会を得た。その中でローマ考古学におけるテッラ・シギリタを始めとするローマ土器の重要性について説明することが出来たうえに、その耳慣れない内容をして少なからぬ聴衆の胸に関心を掻き立てることが出来たことは、本研究の方向性が誤っていないことを示しており喜ばしいことである。

わが国においてテッラ・シギリタというローマ工芸品が、ここまで様々な場所において取り上げられたことは今までなかったことを考えると、わが国にテッラ・シギリタを紹介するという本研究の目的を果たしたと言える。

(5) わが国ではテッラ・シギリタはイタリアの工房から始まると記述されており、最古のテッラ・シギリタがオリエント産であることは知られていない。イタリアワインの大規模輸出に伴って広範囲に分布したイタリア産テッラ・シギリタの学史上の影響力のせいである。

同様に、わが国の歴史学においてテッラ・シギリタが古代経済を語る際の指標の一つ、特に各地域の繁栄と没落を示す資料として使われる際には、テッラ・シギリタに関する情報のアップデートがないために、依然として欧米における 20 世紀前半の概説的な歴史研究の考察を継承し続けていることを指摘したことも重要なことと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

Mukai, T., Rêve, R., Bonifay, M., Aibéche, Y., Ambrosi, J.-P., Borgard, P., Capelli, C., Chiamarella, Y., Copetti, A., Durand C., Foy, D., Nasr, M. et Verlinden, F. - Etude de la collection Aubert-Buès d'antiques africaines au musée de Gap : premiers résultats, *Antiquités Africaines* 52, 2016, pp. 157-184 (査読有)

Quevedo, A., Mukai, T. - Lampes à décor de Baubô dans un contexte du IV^e siècle à Marseille. In DJAOUI, D. éd. - *Histoires matérielles : terre cuite, bois, métal et autres objets. Des pots et des potes : Mélanges offerts à Lucien Rivet*, Editions Mergoïl, Autun, 2016, pp. 215-235 (Archéologie et Histoire Romaine 33) (査読有)

Capelli, C., Bonifay, M., avec la collaboration de Franco, C., Huguet, C., Leitch, V., Mukai, T. - Etude intégrée archéologique et archéométrique des échantillons de céramique africaine sélectionnés. In : Malfitana, D., Bonifay, M. dir. - *La ceramica africana nella Sicilia romana*. Lecce, IBAM, 2016, pp. 268-297 (Monografie dell'Istituto per i Beni Archeologici e Monumentali - CNR) (査読無)

Mukai, T. - Site de production et site de consommation: Tefernine et Sid Jdidi (Tunisie). In : *Rei Cretariae Romanae Favtorvm Acta 43*, Bonn, RCRF, 2014, pp. 607-616. (査読有)

Mukai, T., Aoyagi, M. - Un contexte de la fin du III^e s. à Somma Vesuviana (Campanie, Italie). In : Poulou-Papadimitriou, N., Nodarou, E., Kilikoglou, V. éd. - *LRCW 4. Late Roman Coarse Wares, Cooking Wares and Amphorae in the Mediterranean. Archaeology and Archaeometry. The Mediterranean: A Market without Frontiers*. Oxford, Archaeopress, 2014, pp. 863-872 (BAR Int. Ser. 2616) (査読有)

向井朋生、「地中海を舞台にした古代ローマ経済のグローバル化」、『歴史学研究』、第九一一号、2013年、151-160頁(査読無)

〔学会発表〕(計 4 件)

Bonifay, M., Chiamella, Y., Mukai, T. -

« Revisiter les centaines de poteries romaines de la collection Aubert-Buès ». Conférence de la Société d'Etude des Hautes-Alpes, 2016年2月26日、ガップ(フランス)

向井朋生、「テッラ・シギラタ」、日本西洋史学会第65回大会古代史部会自由論題発表、2015年5月17日、富山大学(富山県、富山市)

向井朋生、杉山浩平、五十川育子、「ソムマ・ヴェスヴィアーナ 2014年発掘調査の出土遺物 ~古代ローマ土器を中心に~」、研究発表会「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元 -ソムマ・ヴェスヴィアーナ 2013/2014」、2015年2月21日、東京大学・駒場18号館ホール(東京都、目黒区)

Mukai, T., Trégliat, J.-C., Heijmans, M. et Dantec, E. - Arles, enclos Saint-Césaire. La céramique d'un contexte d'occupation urbain daté des premières décennies du Haut Moyen Age provençal (fin du VII^e s.-premier moitié du VIII^e s.). LRCW 5. Late Roman Coarse Wares, Cooking Wares and Amphorae in the Mediterranean. Archaeology and archaeometry, 2014年4月10日、アレキサンドリア(エジプト)

〔図書〕(計 1 件)

向井朋生 他、勉誠出版、「時代を証言する土器」、豊田浩志編『モノとヒトの新史料学』、2016、187-200頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向井 朋生 (MUKAI, Tomoo)
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・リサーチフェロー
研究者番号：30620463